

ウガンダにおける野生動物の価値

安藤 元一

東京農業大学准教授(会報掲載時)

筆者の勤務している東京農大の野生動物学研究室には、野生動物の保護にかかわりたいという学生が毎年数多く入ってくる。しかしこれら学生になぜ野生動物を保護せねばならないのかとたずねると、答えに窮してしまうケースが多い。

筆者は1970年代はじめに大学を卒業し、最初の仕事として小原秀雄先生のご紹介によって東アフリカの野生動物を撮影するTV映画チームに加わった。その業務の途中で1973年にウガンダのビクトリア湖畔、エンテベ市にある小さな動物園の展示室を訪れた際、野生動物の価値を説明した11項目の小さな張り紙を見つけた(図1)。その当時、天然記念物のような希少種を保護することだけが野生動物保護の仕事だと考えていた筆者にとって、野生動物の価値が国によって大きく異なることを知ったのは大きなカルチャーショックであった。それから30年以上が経過した現在、あらためてこの張り紙を見直してみると、価値観が地域によって異なるだけでなく、時の経過によっても変わってくるのがわかって、次のように今でも新鮮に思える。

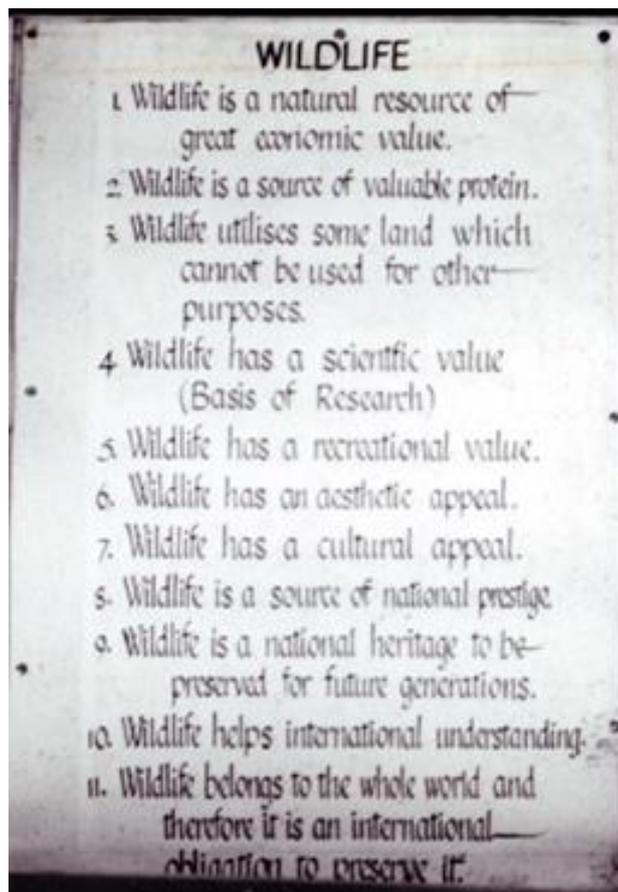


図1. 1973年にウガンダの動物園でみかけた張り紙

1. 野生動物は大きな経済価値を持った天然資源である

畜産学分野では野生動物には家畜原種としての遺伝子資源価値のあることが広く理解されている。しかし野生生物が金銭で表現可能な資源価値を持つことが社会に広く認識されはじめたのは、1992年に生物多様性条約が採択されるにあたって、その資源価値を先進国と開発途上国がどのように分配享受するかが論議大きな論議となってからであろう。しかし1970年代の日本には経済価値を野生動物価値の筆頭に据えるという発想はなかった。それどころか、中国の動物図鑑に経済価値という記載欄があるのを見て、だから中国は遅れているとみんなで笑っていたのが実情であった。

2. 野生動物は貴重なタンパク源である

一人当たりのGDP、平均余命、製造業の割合などからみて、ウガンダは開発途上国の中でもとくに開発の遅れた後発開発途上国(LLDC)に含まれ、世界のLLDC48カ国のうち33カ国がアフリカにある。これらの国では高価な畜産物から動物タンパクを摂取することが困難なので、川魚などの淡水魚が大事なタンパク源になる。ブッシュミートとよばれる野生動物の肉も同様である。しかし肉を求めて野生動物を乱獲すれば動物が減ってしまうので適切な資源管理が必要であり、これは漁業や林業の基本となる考え方である。野生動物の肉を食べることが保護につながるという発想はこれまで国内にはなかったが、獣害対策として撃たれたシカの肉がこの数年は北海道をはじめ各地で土産物として販売されるようになってきた。貴重なタンパク源とはいえないが、野生動物を食べることへの抵抗は少なくなってきたようである。

3. 野生動物は他の目的には使用不可能な土地をも利用する

ケニアの首都ナイロビの郊外にはサバンナがいきなり広がっている。土壌がやせていて農業に使えないためである。粗放的牧畜が行われている国の土地利用を模式的に見ると、最良の生活条件を備えた場所に都市が発達し、土壌の肥沃な場所に農業が発達し、農業の成り立たない場所が牧畜業や林業に使われ、そしていずれの産業も成り立たない不毛の場所が野生動物の主要生息場所となっている場合が多い(図2)。多くの世界地図が平地を緑色に、山地を茶色に塗っているのはこうしたことを背景にしている。これは日本の山野だけを見ては理解できない状況である。

4. 野生動物は科学研究する価値を持つ

明治以来、わが国では科学研究は何か役に立つために行われると考えられることが多い。筆者の所属する東京農業大学は実学主義を看板に掲げているが、こうした発想の典型であろう。純粹な生態学研究論文においてさえ、「保全に資するためこの研究を行った」といった文言を緒言に書かねば気のすまない研究者も多いようである。これに対して西欧では研究すること自体、すなわち知的好奇心を満たすことが目的であるという考え方が強い。対象動物がいなくなれば研究する楽しみがなくなるのではないかというわけである。神がつくった世界がいかに秩序に満ちているかを証明する作業は、神が存在することの証しであるというキリスト教の影響なのかもしれない。

農学部的発想と理学部発想の違いといいかえてもよいだろう。

5. 野生動物はレクリエーション価値を持つ

サファリツアーで知られるように、東アフリカでは1970年代においても観光による外貨収入はコーヒーや紅茶などのプランテーションと並んで国の経済を支えていた。しかし1970年代のわが国においては、観光産業が野生動物の存在に依存するといった状況はなかった。餌付けされたサル群れの見物などが行われていた程度であろう。ホエールウォッチングに代表されるようにエコツーリズムが一部地域で地元経済を支えるほど重要になってきたのは近年のことである。

6. 野生動物には景観的な魅力がある

これは前項と似ているが、眺めて楽しむためには野生動物が見えねばならない。草原性の大型動物の多いアフリカでこそ強調できる価値であろう。小型動物や森林性動物の多い我が国では、餌付けなどを行わなければ屋間に動物を見つけることは容易ではない。

7. 野生動物には文化としての魅力がある

宗教、民俗、歴史景観などの文化と自然生態系との関わりが世界中で注目されだしたのはこの10年ほどである。国連機関や世界資源研究所などが世界の生態系現況を「ミレニアム生態系評価」として2005年にとりまとめた。この報告では「生態系サービス」という用語を用いて、生態系は食料や燃料の供給など物質的な面だけでなく、肉体・精神的な健康や文化を築くためにも人類に対して貢献している点を強調している。しかし動植物と人間との多様な関わり方に関する研究は、これからの分野であろう。

8. 野生動物は国の威信の源である

アフリカ諸国は密猟の横行などをしばしば西欧諸国から非難されている。我が国もクジラ問題や象牙の輸入などで西欧からしばしば非難されるが、野生動物を管理できない後進国とのイメージをなんとかしたいという思いは、これらの国では我が国の場合よりもはるかに強いと思われる。

9. 野生動物は未来の世代にそのまま伝えてゆかねばならない国の遺産である

これは世界遺産条約の発想そのものである。この条約は1972年に採択され、世界遺産リストへの登録は1978年から始まっているので、この張り紙が書かれたのは採択間もない頃である。日本各地では近年になって世界遺産への登録が競争のように行われるようになったが、わが国がこの条約を批准したのは先進国では最後の1992年であった。世界遺産条約の発想をわが国で1970年代に知っている人はほとんどいなかったのではないだろうか。

10. 野生動物は国際理解を促進する

ある国の野生動物のことを知ろうとすれば、おのずからその国のことを知ることになる。観光や科学研究をはじめ、野生動物がいなければできないような国際産業、国際協力や国際交流もあ

る。この項目はこうした発想で書かれたのだろう。わが国では野生動物にこうした価値を意識することはほとんどないだろう。

11. 野生動物は世界全体の所有物であり、それゆえにそれを保存することは国際的な責務である

この精神は1971年に採択されたラムサール条約にも見られる。ある国の渡り鳥生息地が失われてしまえば、その鳥は渡り先の国にもいなくなってしまう。こうした問題に取り組むためには、国際的な情報交換や共通の目標を定めた協力体制が不可欠になる。筆者が訪問した当時のウガンダは独裁で悪名高いアミン大統領の統治下で、外国人の追放などで経済は完全に破綻していた。その後もタンザニアとの戦争やエイズ問題などが次々と発生して、貧乏国である状況は変わっていない。しかし1990年代にはカナダに次いで2番目に「国家湿地政策」を採択し、大統領が国民に湿地の価値を理解し保全を進めるよう呼びかけるなどの取組を進めてきた。その努力が認められて、2005年には同条約の締約国会議がアフリカで最初に開催された。ひるがえって、わが国の野生動物保全活動において、「国際的な責務」という発想はどれだけ意識されているだろうか。

さて、今日の日本において野生動物の価値を11項目で述べよといわれたら、われわれは何を挙げるだろうか。

(JWCS 会報 No. 51 2007年11月より転載)